

7.生物の生息・生育環境の保全

提言

タンチョウやキタサンショウウオ、イトウ、カブスゲ群落（ヤチボウズ）などの釧路湿原特有の動植物の生息・生育環境を把握し、その保全を図るべきである。

具体的施策

○生物の生息環境の把握とその保全

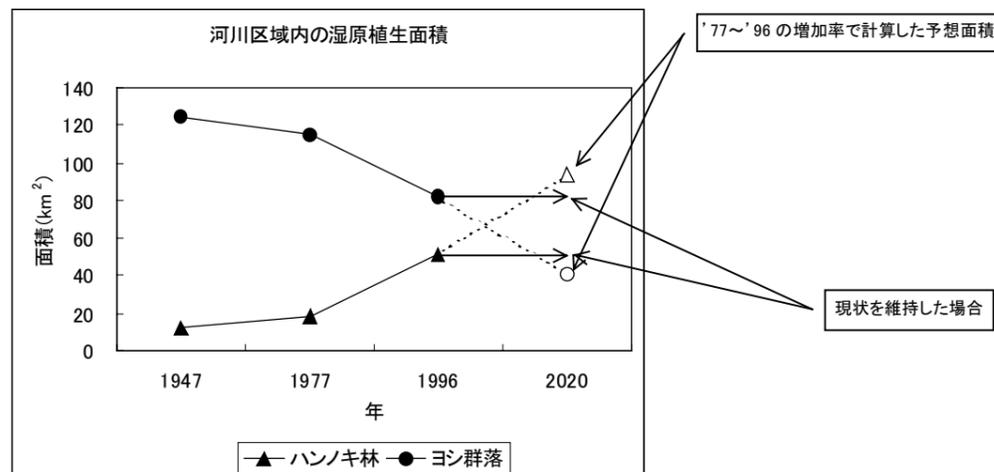
- ・ハンノキの更新、発達のメカニズム解明
- ・茅沼地区におけるハビタット評価手順の検討
- ・湿原生態系及び生物多様性保全のための湿原環境の管理及び評価システムの開発に関する研究調査の実施
- ・釧路湿原定点景観調査・水質観測調査の実施
- ・タンチョウ・キタサンショウウオの生息状況調査

○釧路湿原全域を対象とした植生図の作成

- ・釧路湿原の一部調査

これまでの調査・検討結果

○河川区域内の湿原植生面積（第3回湿原再生委員会）

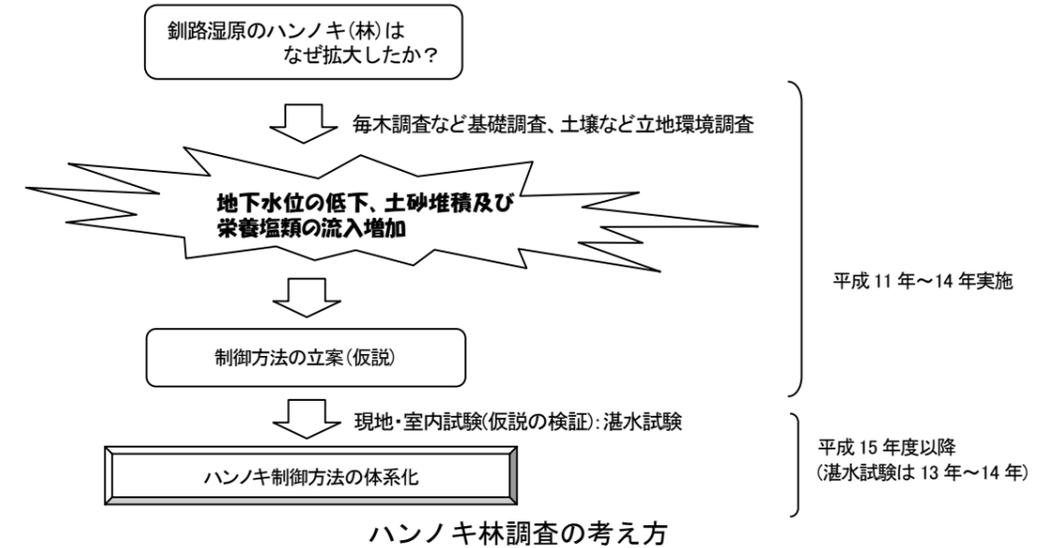


湿原植生面積の変遷

これまでの調査・検討結果

○ハンノキ林の成立要因の解明（第6回調査技術小委員会）

・ハンノキ林調査の考え方



ハンノキ林調査の考え方

・ハンノキ林調査位置

様々な立地環境にあるハンノキ林で調査を行うことによって、釧路湿原で起きている変化を網羅する事とした。調査地は上図に示す箇所とした。また、チルワツナイ調査地にはハンノキの分布していない調査地「チルワツナイ2」を設け、ハンノキが分布する「チルワツナイ1」と区別した。



調査地位置図

これまでの調査・検討結果

○調査地の類型化

最初の序列化（CCA による）とクラスター分析によって 4 つ区分され、さらに、C グループを CCA によって 3 つに、林床植生のクラスター分析によって、D グループを 2 つに細分した。

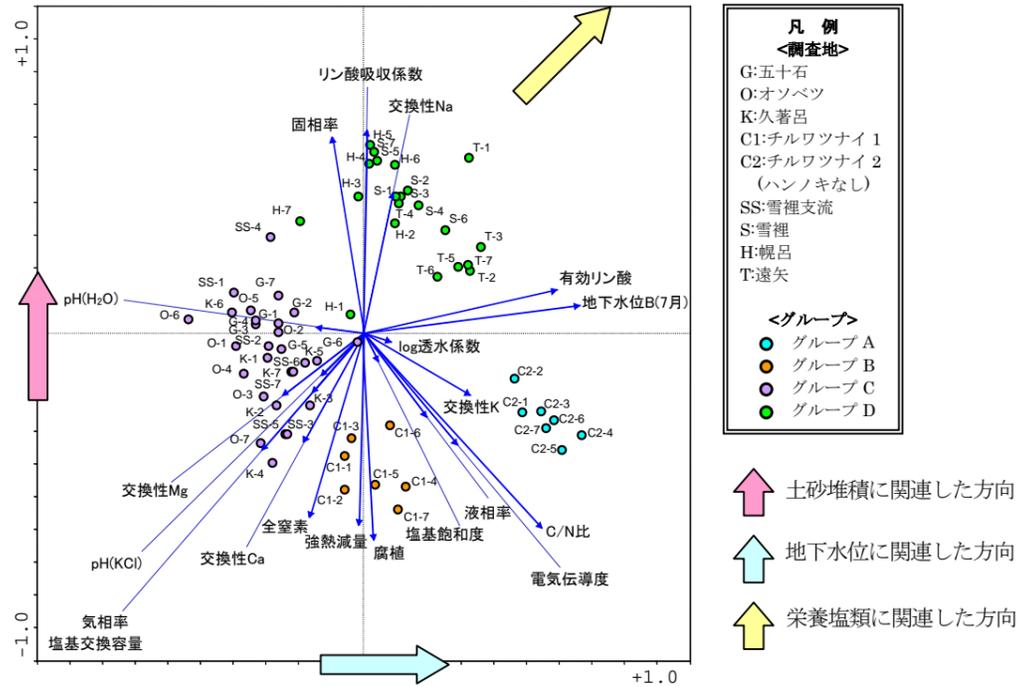


図 1-1 CCA オーディネーションダイアグラム (全調査地)

・ハンノキ林成立過程の類推

栄養塩類と土砂の流入は独立した環境変化ではないと考えられるので、両者を分割しなかった。その結果、どの調査地も同じような影響を受けて、現在のハンノキ林が成立しているわけではないことが示唆された。これはハンノキ林の制御が要求される場合、対象とする地区の環境に応じた方策が求められると考えられる。

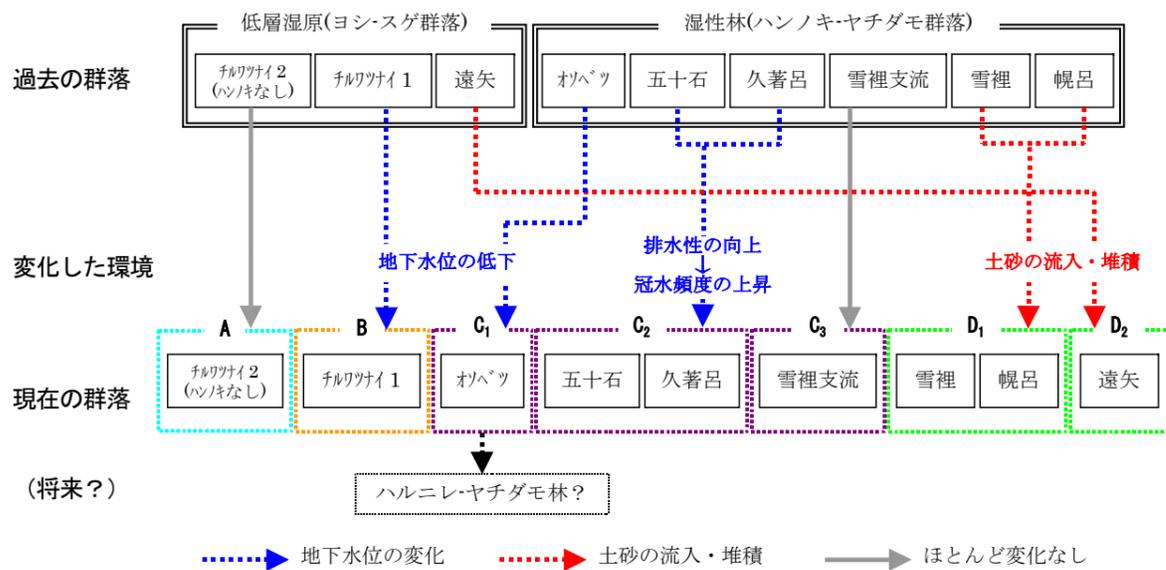
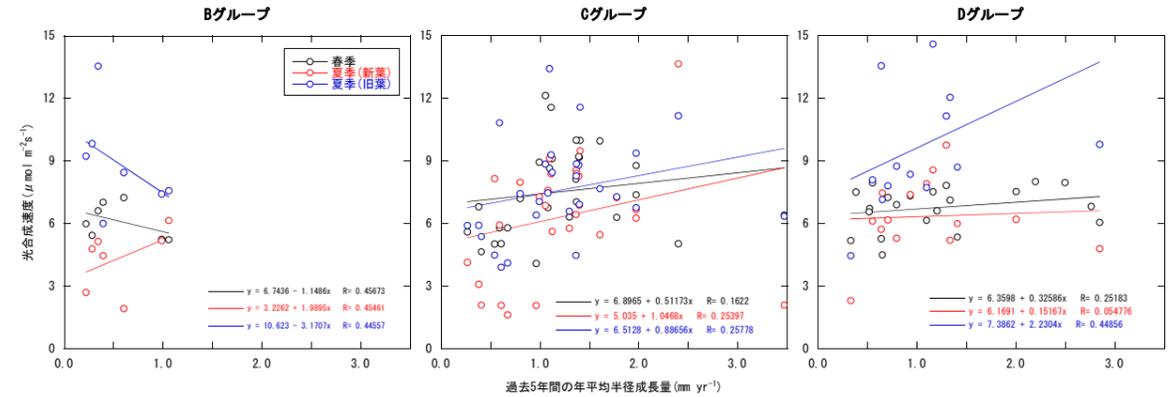


図 1-4 各調査地におけるハンノキ林の成立過程

これまでの調査・検討結果

○類型区分毎のハンノキの光合成特性

グループ(立地環境)による違いが認められ、光合成特性においても立地環境を反映していると考えられる。



過去5年間の年平均半径成長量と光合成速度の関係

・まとめ

- (a) 釧路湿原におけるハンノキ林の拡大は、地下水位低下、土砂堆積、栄養塩類の流入等の、単独または、複合的要因であることが示唆された。またそれは、ハンノキ林によって異なる(CCAの結果)ことも示唆された。
- (b) 地下水位低下、土砂堆積、栄養塩類流入の植物に対する影響は、林床植生の組成には表われない(CCAの結果)。またこれらの影響は構造では表現できないが、光合成特性ではある程度表現された。

H15 年度実施(検討)内容

- ・流水の影響を直接受けているハンノキ調査
- ・地下水、リン、窒素の影響検討